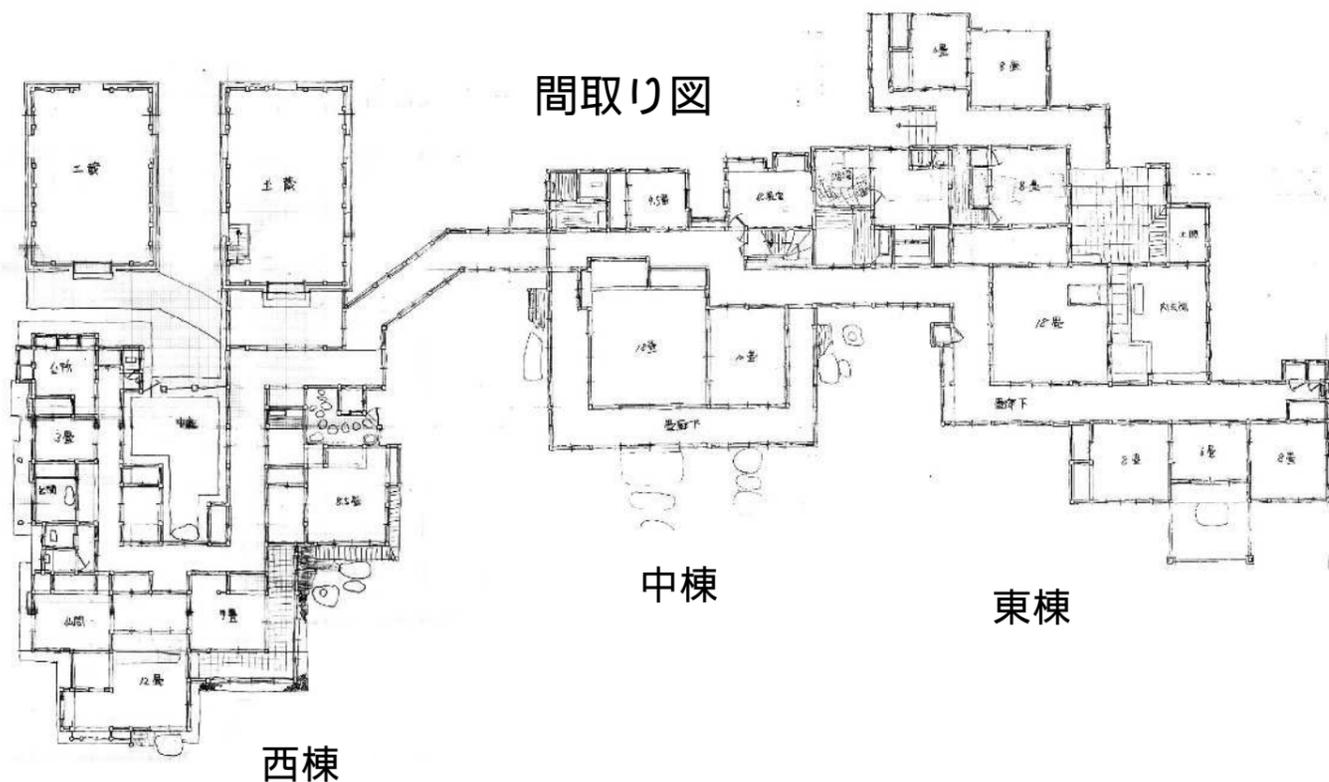


# 遠山記念館

ものづくり大学 建設学科1年

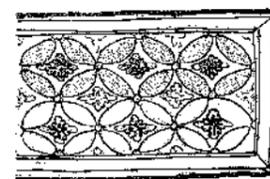
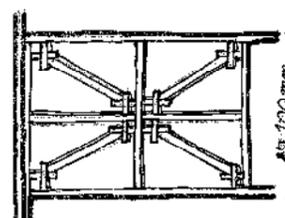
針生直樹、東原大地

間取り図

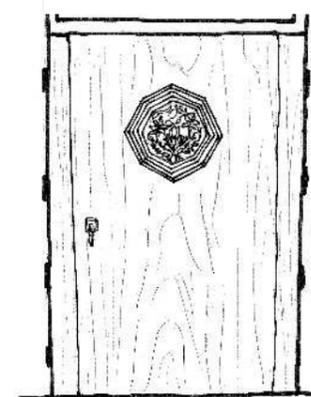


中棟 外観

装飾類



寝室への扉



中棟の2階、遠山邸の主である遠山元一の寝室の扉。

4尺(約120cm)の桐の板が使われている。

大きな板材を取ることが難しい桐材において、この大きさの板材は大変貴重だ。

扉の中央上部には、浮彫で加工された8角形の美しい装飾が施されている。

館内の至る所に、職人の技が光る装飾がある。

上は東棟の腰窓、下は中棟の欄間の装飾の一部のスケッチだ。

館内をくまなく歩き、様々な装飾を見つけてほしい。

遠山記念館の邸宅は、埼玉県比企郡川島町出身で日興証券の創業者である遠山元一が、生家の再興と母の住まいを目的として建てた。建築様式が異なる3棟を渡り廊下で結ぶ構成になっている。

東棟は農家を基本に武家の趣を取り込んでいる茅葺き屋根の建物。18畳の居間には縁無畳が敷いてあり、2枚の畳が斜めに埋め込んである。これは芸術作品で“浮島”と言い、川島町出身の彫刻家、長澤英俊さんの作品の一つだ。

中棟は伝統的な書院造りであり、18畳の客間、10畳の次の間がある。客間の天井のみほかの部屋と比べて高くなっている。2階は床の間付きの洋間で、ソファ等の家具は床の間との位置関係が重視されている。

母のためにつくられた西棟は京風の数寄屋造りで、中棟までと比べて天井は低く、壁は土壁となる。客間3部屋と仏間の計4部屋はそれぞれ天井の葺き方が違う。